

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00938

研究課題名（和文）現代ロシアの文化外交と美術館 「記憶の政治」のメディア分析

研究課題名（英文）Public Diplomacy and State Museums as a medium in Putin's Russia--

研究代表者

巽 由樹子（Tatsumi, Yukiko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：90643255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代ロシアの美術館が文化外交の中で、いかにロシアの歴史的イメージの創出に寄与しているかを明らかにして、「記憶の政治」研究の深化を図ることを目的とした。研究期間を通じて、コロナ禍とウクライナ戦争によるロシア渡航の困難のため、もともと構想していた現地でのミュージアム調査を実施にもとづく研究は遂行できなかった。だが、戦後日本でのロシア・ソ連観の形成と、現在のウクライナ侵攻下でロシア、ウクライナの両者がとりあげる「伝統」の形成について、それぞれに関係するミュージアムの展示とコレクション形成から調査と分析を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本でのロシア・ソ連観の形成と、ウクライナ侵攻下でロシア、ウクライナのいずれもがとりあげる「伝統」がいかに形成されたかについて、それぞれに関係するミュージアムの展示とコレクション形成の論理から明らかにすることができた。そうした成果を、一般向け啓蒙図書である巽由樹子 訳・解説『ミコラ・サモーキシユ「ウクライナの装飾文様」』（東京外国語大学出版会）として刊行し、市民向け講座を実施したことで社会に向けて還元した。事業年度終了後、「昭和のロシア」についても同様の成果公開を目指す。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to deepen the study of the 'politics of memory' by identifying how Russian state museums contribute to the creation of a historical image of Russia in the context of cultural diplomacy. Due to the difficulties of travelling to Russia throughout the research period, caused by the pandemic and the Russian invasion of Ukraine, it was not possible to carry out the project based on the field research as originally planned. However, through research and analysis of museum exhibitions and the formation of collections in Japan and the Russian Empire, it has been revealed how the view of Russian history and 'tradition' has had an impact on Japan and international society to the present day.

研究分野：歴史学

キーワード：ロシア 美術館 記憶の政治 歴史観 ウクライナ 昭和 文化外交

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、冷戦終焉後の国際秩序のもとで各国が新たな位置づけを得るべく、自らの過去についての語りを再編しようとする動向が見られる。こうした「記憶の政治」は、各国が固有の歴史的文化を国際社会に宣伝するソフトパワー外交と不可分である。ロシアもまた例外ではなく、「日本におけるロシア年」をはじめとするイベントを実施し、世界各地で文化外交を展開してきた。しかし帝政期からソ連期を通じて、ロシアの文学者、演劇人、美術家たちは自律的な文化活動を行い、ときには反権力的な政治姿勢を表明してきた。そうした表現者たちや芸術団体を動員する文化外交が、ロシア国家の戦略通りに伝統や歴史を世界に発信していると考えるのはやや単純に過ぎる見方である。それゆえ、現代ロシアの美術館を自らメッセージを発信するメディアと見做し、それが文化外交の中でいかにロシアの歴史的イメージの創出に寄与しているかを明らかにして、「記憶の政治」研究の深化を図る必要がある。

2. 研究の目的

上述した背景のもと、本研究は分析対象として、文化外交の催しに必ず参加を要請される、現代ロシアの四大美術館、すなわちエルミターージュ美術館、プーシキン美術館、トレチャコフ美術館、ロシア美術館に着目した。これらの美術館は、ソ連期以来、美術分野のアカデミズムの一中心として、また、専門職から一般職に至る雇用の大拠点として、ロシア社会に深く根ざしてきた。他方で社会主義体制崩壊後、自力経営を求められる現在では、現代美術にもコレクションを拡大し、話題性と集客力を持つ企画展の開催に腐心している。そこで美術館を、こうした事情を持ちつつ自らメッセージを発しようとする主体と見做し、その思想と利害が政府主導の文化外交の中でどのように実現されているのかの解明を、目的として設定した。

そのために、エルミターージュ美術館を主たる分析対象として、他の三館と比較しながら、(1) 現代ロシアの美術館と愛国(エルミターージュ館長ミハイル・ピオトロフスキーの構想と戦略の分析)、(2) 現代ロシアの美術館とヨーロッパ(対口経済制裁開始後の、エルミターージュ・アムステルダム館による欧州美術界でのプレゼンスの追求と欧州でのコネクションの分析)、(3) 現代ロシアの美術館と日本(日ロ文化外交の戦後における実践と現在における実効性)という三項目から分析と考察を進めることを計画した。

3. 研究の方法

事業期間中、サンクトペテルブルク、モスクワ、アムステルダムなどで、エルミターージュ美術館をはじめとするミュージアムの展示とアーカイヴの調査、関係者へのインタビューを実施し、学会報告による中間発表、査読誌への論文投稿による成果公開につなげることを想定した。そうした成果を集約し、事業期間終了後に単著として刊行することを最終的な目標とした。

4. 研究成果

2020年以降のコロナ禍、さらに2022年以降のロシアのウクライナ戦争により、現地での調査を主眼としていた本研究課題は、想定通りの遂行ができなくなった。プーチン政権が「記憶の政治」にもとづく歴史観をウクライナ侵攻の主要な理由づけとしたにも関わらず、それに関わる現地での調査を実施できないことはきわめて不本意であった。

だが、方針や方法を変更しつつ、毎年度、研究成果を積み重ねることはできた。また、研究開始当初は想定しなかった内容ではあったが、最終年度には単著の刊行に至った。以下、各年度の業績を挙げ、説明する。

【2019年度】

4月にマンチェスター大学よりヴェーラ・トルツ教授を招聘し、現代ロシアが国際発信力の強化に用いているネット・メディア「RT (Russia Today)」に関する講演会を3回にわたって開催した。つづいて、6月に東京で開催された国際学会 East Asian Conference on Slavic Eurasian Studiesで“Culture and Diplomacy in Japan: Soviet Union Relations in the 1950s-1970s”と題するパネルを組織し、“Canonizing Russian Fine art in Japan in the 1970s”と題した学会報告をおこなった。自身の報告は、1970年代の日本へのロシア・ソヴィエト美術の導入に関するものであり、同時期のソ連文化の日本映画、文学、経済など、多様な分野への影響について分析している他の報告者と議論した。年明け3月に2週間に渡り渡英し、マンチェスター大学、リーズ大学でソ連美術の日本への導入過程について報告する予定で準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大により中止となった。

【2020 年度】

コロナ禍の終息や治療法が見えない状況で、国内外への出張調査が実施できなかったこと、幼稚園・小学校が閉鎖されて家庭での負担が増加する一方で、大学はオンライン授業への全面転換の準備が必要だったことから、研究に割ける時間が極度に減少し、誠に苦しくつらい 1 年だった。そのため、現代ロシアのミュージアム分析は調査、研究成果の活字化ともにならず、大きな反省が残った。

他方で、日本国内で調査可能な、上記の研究目的項目(3)に重点を移し、1970 年代ソ連美術の日本への流入についての文献講読と、武蔵野美術大学図書館および大宅壮一文庫での史料調査を進めた。また、冷戦期日本でのソ連観の形成を文化社会史の観点から分析することを志向する研究者同士で、「昭和のロシア」と題した研究グループを発足させ、オンラインで 2 度の研究会を実施し、『『昭和のロシア』の方法論 1960 - 80 年代の美術界を事例として』と題する報告をした。こうした作業からは多くの知見を得て、成果公表のための基礎を作ることができた。

【2021 年度】

ひきつづきコロナ禍によりロシア渡航が難しく、さらに、年度末 2 月のウクライナ侵攻とその後の日ロ関係の悪化により、現地に向いての調査はさらに困難になった。

しかし、日本国内の史料で分析可能な課題については、相当程度に進捗することができた。まず、2021 年 10 月にロシア史研究会年次大会にて「昭和のロシア - 戦後の日ソ文化外交の歴史的な分析に向けて」と題したパネルを実施した。同年 12 月に、このパネルの参加者を中心とするミーティングの機会を持ち、ソ連の対日外交によって昭和期の日本でいかにロシア・ソ連文化が権威化していったかを諸芸術分野から具体的に明らかにし、論文集を刊行する計画をまとめた。ここでは日ソ文化外交の中でのミュージアム展示によるロシア観の形成の分析を担当することとした。2022 年 3 月には、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで、研究報告会「昭和のロシア - 日ソ文化外交と 戦後日本のロシア観形成に関する研究」を実施し、「1970 - 80 年代日本へのソ連美術紹介 - 三越と西武の役割を通して」と題する報告を行った。フィールド調査の困難に直面する中で、日本国内の史料で遂行可能なテーマを設定し、自身及びグループによる研究として実績をあげることができた。

【2022 年度】

ひきつづき「昭和のロシア」研究会を実施し、論文集の編纂方針をとりまとめた。他方で、ロシアのウクライナ戦争が横行される中、プーチン政権がこれを正当化する言説と、被害を受けるウクライナでの伝統の称揚という現象に、両国それぞれの「記憶の政治」から醸成される歴史観が作用していることがうかがわれた。そのため、当初の課題設定の際には想定していなかった、そうした歴史観の参照源となる、近代ロシア帝国のミュージアム展示やコレクション形成の思想を分析する作業にも着手した。その成果として、19 世紀後半に「ロシア様式」という美術上の「伝統」を宣伝した評論家ヴラジーミル・スターソフ『ロシアの民衆的装飾』(1872 年)につき、国内研究機関やオンライン史料による調査にもとづく分析を付した抄訳(『スラヴ文化研究』20、2023 年、104-119 頁)を発表した。

国際情勢により、ひきつづきロシアでの調査は見込みが立たなかったが、年度末にはコロナ禍の終息が見えてきたことから、3 月に米国に渡航し、ニューヨーク公共図書館、メトロポリタン美術館で関連資料を収集した。メトロポリタン美術館は、日ソ間と同様、米ソ間の第二次世界大戦後の美術交流で中心的役割を果たした機関であり、比較考察の対象として有望であることが確認できた。あわせて、日本国内では入手の難しい、ウクライナ美術に関する資料の収集を行い、次年度の作業の基礎とした。

【2023 年度】

前年度に近代ロシア帝国におけるミュージアム展示とコレクション形成の思想の検証作業を進めたことを受けて、12 月に巽由樹子 訳・解説『ミコラ・サモーキシウ「ウクライナの装飾文様」』(東京外国語大学出版会)を復刻出版した。これは 19 - 20 世紀初頭のウクライナ出身でロシア帝国の御用画家だった人物の古刺繍スケッチ集だが、近代化の時代の博物館における保存と展示の思想と、現在のウクライナ侵攻下での民族文化の象徴化という文化的ナショナリズムが結びつき、現地ではリバイバルして言及される作品である。巻末には画集としてはやや長い解説を付し、そうした背景や論理について考察を展開した。年明け 1 月には「連続市民講座：世界を学ぶ、世界を生きる」(東京外国語大学×読売新聞立川支局 共催企画)で「ウクライナの装飾文様 - 美術とナショナリズムの関係の今昔」と題した講演を行い、一般向けに研究成果を還元した。なお、近代ロシアでの歴史観形成に関わる出版活動の担い手について、3 月に論考「帝政期ロシアの出版ジャーナリズム 担い手とその特質について」『EAA Booklet 34/EAA Forum 24 出版・報道文化の近代化 1 「人」から読み解く』を刊行した。

また、「昭和のロシア」研究会を継続実施し、年度末には今後の刊行スケジュールを具体的に定め、出版についての交渉に入った。

研究期間を通じて、コロナ禍とウクライナ戦争によるロシア渡航の困難のため、もともと構想していた現地でのミュージアム調査を実施にもとづく研究は遂行できなかった。だが、戦後日本でのロシア・ソ連観の形成と、現在のウクライナ侵攻下でロシア、ウクライナの両者がとりあげ

る「伝統」の形成について、それぞれに関係するミュージアムの展示とコレクション形成から調査と分析を進めることができた。想定外の事態に見舞われ続けた本課題だったが、現代の事情と切り結んだ検証を切り開くことができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 巽由樹子	4. 巻 20
2. 論文標題 ヴラジーミル・スターソフ『ロシアの民衆的装飾』（1872年）抄訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 スラヴ文化研究	6. 最初と最後の頁 104-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/124962	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 巽由樹子
2. 発表標題 「文化外交、文化冷戦、文化社会学 研究動向について」パネル『昭和のロシア：戦後の日ソ文化外交の歴史的分析に向けて』
3. 学会等名 ロシア史研究会年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 巽由樹子
2. 発表標題 「1970 - 80年代日本へのソ連美術紹介：三越と西武の役割を通して」
3. 学会等名 2021年度SRC共同利用・共同研究拠点公募研究（プロジェクト型）成果報告会「昭和のロシアー日ソ文化外交と 戦後日本のロシア観形成に関する研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 巽由樹子
2. 発表標題 「昭和のロシア」の方法論1960 - 80年代の美術界を事例として
3. 学会等名 第1回「昭和のロシア」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yukiko Tatsumi
2. 発表標題 Canonizing Russian Fine art in Japan in the 1970s
3. 学会等名 East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, panel “ Culture and Diplomacy in Japan -- Soviet Union Relations in the 1950s -- 1970s ” (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 巽由樹子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 96
3. 書名 『ミコラ・サモークシュ「ウクライナの装飾文様」』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関